

自由思想

第166号・2022年11月

巻頭随想
選択か成り行きか

井芹 浩文

〈再録〉

人生と投機の職能

石橋 湛山

「人生と投機の職能」を讀んで

石橋湛山翁の意見書に想う

齊藤 惇

「人生と投機の職能」について

石橋湛山の考えた「投機」

稲野 和利

「反攻の象徴」としてのドローンと戦争倫理

大槻 奈那

石橋先生の墓

松元 雅和

——東洋経済新報社退社の挨拶に代えて——

井坂 康志

政界のロマンチスト 石橋湛山

村山 公三

——情熱と信念が生んだ反逆児——

身近に見た湛山の实像

浅野 純次

——解題「政界のロマンチスト 石橋湛山」——

——

論壇季評【第83回】 安倍政治への評価は大きく分裂／アベノミクスの失敗は明らか／結党100年を迎える共産党／党内の民主主義と多様性が必須／なせウクライナにこだわるのか／ブーチンの精神論と歴史的背景／ウクライナ戦争の終わらせ方／露の一方的併合で停戦遠のく／人口減が止まらぬ“安い国”日本／日本だけでなく世界的課題に

る。戦争倫理は固定的でなく、戦争の実態に合わせて絶えず
問い直される必要があるということだ。

ロシアのウクライナ侵攻は国際法上不正である。ドローン

を用いたウクライナの普救に対して、私たちは安堵を覚え、

賞賛を向けるかもしれない。しかし逆に、核兵器使用すらち

らつかせてウクライナおよび国際社会を牽制しようとするロ

シアが、今度はドローンをより効果的に用いて成功裏に軍事

作戦を進めるとなればどうか。技術革新が正しい戦争に寄与

する可能性のみならず、不正な戦争に寄与する可能性にも目

を向けながら、「反攻の象徴」としてのドローンがもたらす

新たな戦争の行方を見極める必要があるように思われる。

引用・参考文献

- Kahn, Paul W. (2002). "The Paradox of Riskless Warfare," *Philosophy and Public Policy Quarterly* 22/3: 28.
- Strawser, Bradley Jay (2010). "Moral Predators: The Duty to Employ Uninhabited Aerial Vehicles," *Journal of Military Ethics* 9/4: 332-368.
- シヤエー、クレアアール (2018) 『ドローンの哲学——遠隔テクノロジと「無人化」する戦争』漢名宮藤哲良、明石書店。
- 松元雅和氏略歴
東京都生まれ。2001年慶應義塾大学法学部卒業。200

石橋先生の墓

——東洋経済新報社退社の挨拶に代えて——

ものつくり大学教養教育センター教授
井坂康志
石橋湛山記念財団研究員

織にも、現実行動と内的直観との調和のようなものがなかつ
たら、覚醒時に一貫した行動はとりがたいだろうと私は勝手に
に理解した。

私の東洋経済時代、確か2011年の大震災のあたりから
だっただと思うが、気が滅入っていくつか日暮里の善性

寺に出向き、石橋先生の墓前で時を過ごすようになった。墓

というものはかえすがえすもよくできたもので、石の切り出

しに過ぎないはずなのに、故人からの語りかけを聞くような
親密な気持ちをもたらししてくれる。

墓所を通して石橋先生と対話するというようなことは、も

ちろんただそんな気がするというだけのことである。だが、

人が太古からたゆまず墓を建て続けてきたところを見ると、
何かしらそれは人の日常意識に潜在的に作用するものがある
のかもしれない。事実、私の知人に新報社の社長で、尊敬す
る先代の墓所に一日も欠かさず詣でている人がいる。私の中
には目下そんな葬儀な生活態度は存在しえないのだが、墓と

私は石橋先生を個人的に尊敬してきた。もちろん尊敬に値
するかどうかは人が決めることではない。自分が決めること
だ。東洋経済新報社に一定期間在職したことも関係ないとき
々言えるかもしれない。

私の石橋先生への敬意はともかくとしても、やはり石橋先

生の言葉として並び称される東洋経済新報社とは、どうも妙

な差障りがあるようにも感じていた。私は2022年の3月末

で同社を退社したので、約25年間お世話になったわけだが、

私の半直な印象の中で、どうしても石橋先生と東洋経済はし

っくりとした一幅の絵のように調和してくれない。そのよ
うな気持ちの始末には在職中も今も戸惑いを覚えなにかとい
うと曖になる。
先日ある本を読んでいたら、無意識というものは、日中活
動するときはまどろんでおり、かえって夜睡眠状態になると
覚め出して活発に動き出す——夢という形式をとって——と
いう主張を目にした。なるほどと思つた。どんな人にも、組

いふものは、そこにやってくる者の心根に応じて、照しつ

もある種の心理的作用を及ぼすのは魂かのような

たふんいくらかの馬鹿を経て、私の方の気の持ちようも変

わったのだらう。日暮里善性寺の墓所に無心で立っ

るだけで、私は日常の雑念から解放され、妙な安堵の念に満

たされるようになった。私の場合それは目覚めながら見る夢

に似ていた。

石橋先生の墓がもう一つあるとは、かねてより聞いていた

なかなか訪問の機会がなかったが、震災の翌年、山梨県の身

延に赴く機会を得た。身延山は日蓮宗でも宗教的礼拝の本拠

地である。私にはその方面の知識も信心もなく、宗教ではな

い方面から訪れるのに多少の引け目はあったが、石橋先生の

墓参という赤口があったのは救いだつた。

墓所は意外にも山深い若に置かれた一角にあつた。私が目

にした墓石は素朴かつ頑健な佇まいを帯びており、いかにも

石橋先生らしいと思つた。もちろんこれは私の矛盾に合致し

ていた。墓は墓である限り、かつてこのような人物が生きて

呼吸し活発に心身を働かせていたことを示す一種のしるしで

ある。そのようなしるしが現に私の中に尊敬の念を呼び起し

す限りにおいて、私に何かを語りかけていると感じないわけ

にはいかなかつた。

* * *

東洋経済は市場や株式など総じて経済的営みを活動の中心

部に強い印象を受けたのを覚えている。私とその時どんなこ

とを考えて面接に臨んだのかはあらかた忘れてしまつたし、

どんな質問を受けたのかもほとんど覚えていない。けれども、

二階のそこの時間がびたりと静止したかのような、澄んだ

空気に支配された感懐だけはつきりと記憶している。

経済や株式などの日々の雑踏と向き合いつつ、かくも静謐

な一隅を社内に見ているのに驚き、心の何かが震えた。廊

下の壁には何枚かの肖像写真がかかつていて、この会社が歴

史をこのうえなく大事なものとして保存に努めていることが

知られた。何という多くの精神と知性がこの会社の言論を育

てきたか。きつこの静かな力が働く人たちにどうして清き

水となつて知らず喉を潤し、心を鼓舞し続けてきたのだろうか

と私は思つた。

堂を用いてほしいのは、それが1997年の2月、いまだ

ハブルに狂奔した擧げ句、その必然的崩壊の爪痕で見当識を

失い、社会は断腸の思いでその廃墟の復興という試練をまよ

もに受け止めつつあつた時代であつたことだ。日々の新聞に

は、いかに日本人が意気揚々と道を誤つたかを証明すること

き記事で覆いつくされていく。

私は密かに二階の回廊を「先相様の部屋」と名付けるこ

とにした。もちろん人誰にも言つたことはない。

空回全体が、何かを静かに指さしているように感じた。そ

れは調度のように固く、冷たく、半は威嚇するように、浮か

れた時代などにはまったく無縁に、あたかも太古から形成さ

れた水河のようになつた。

として、経済活動とは世俗的営みの代表にはかならない。

とはいへ、その中心にある精神や理念は、現実の中にあつて、

ことのほか純粹さを維持せずして成り立つものではな

い。このことを明言したのが石橋先生である。

石橋先生はジャーナリストであり、時に政治家でもあつた

が、何より偉大な教育者であつた。ジャーナリストは自分が

書けばよいが、教育者となると人生万般について人に教える

ければならない。ジャーナリストや政治家と教育者は一応ま

つたく別物なのだ。私が石橋先生に惹かれるのは、先生が

らあまりにも多くを教えられるから。しかも、その教え方

が、まったく世俗の形式をとりつつも、宗教家もしくは哲

者のそれだつた。先生は経済や政治などありありとした現実

に、いさかか理念的妥協を行わなかつた。

石橋先生は、現実世界をひたすら正確に、正直に、誤魔化

すことなく語ろうとした。経済用語を使用しなければなら

ないときは、正確に考え運び抜かれた語彙に限られている。

一見ありふれた小石も、石橋先生の手にかかると金剛石に姿

をわつた。石橋先生の残した文章は一つの例外もなく、金剛石

からなる建築物にはかならない。

* * *

もう四半世紀以上も前のことなので、記憶も次第に薄らぎ

つつある。日本橋・東洋経済新報社社屋に入社試験に訪れた

とき、面接が行われた二階奥の会議室へと続く少し薄暗い回

廊に強い印象を受けたのを覚えている。私とその時どんなこ

とを考えて面接に臨んだのかはあらかた忘れてしまつたし、

どんな質問を受けたのかもほとんど覚えていない。けれども、

二階のそこの時間がびたりと静止したかのような、澄んだ

空気に支配された感懐だけはつきりと記憶している。

経済や株式などの日々の雑踏と向き合いつつ、かくも静謐

な一隅を社内に見ているのに驚き、心の何かが震えた。廊

下の壁には何枚かの肖像写真がかかつていて、この会社が歴

史をこのうえなく大事なものとして保存に努めていることが

知られた。何という多くの精神と知性がこの会社の言論を育

てきたか。きつこの静かな力が働く人たちにどうして清き

水となつて知らず喉を潤し、心を鼓舞し続けてきたのだろうか

と私は思つた。

堂を用いてほしいのは、それが1997年の2月、いまだ

ハブルに狂奔した擧げ句、その必然的崩壊の爪痕で見当識を

失い、社会は断腸の思いでその廃墟の復興という試練をまよ

もに受け止めつつあつた時代であつたことだ。日々の新聞に

は、いかに日本人が意気揚々と道を誤つたかを証明すること

き記事で覆いつくされていく。

私は密かに二階の回廊を「先相様の部屋」と名付けるこ

とにした。もちろん人誰にも言つたことはない。

空回全体が、何かを静かに指さしているように感じた。そ

れは調度のように固く、冷たく、半は威嚇するように、浮か

れた時代などにはまったく無縁に、あたかも太古から形成さ

れた水河のようになつた。

た。私は清山部屋を何度も利用したが、そのときの心のあり

ように従い、いつも異なる印象を私にもたらした。

自由で泥利とした奥の院の主は、肉体的な寿命を経て死んでいく。これはかりはとうにもならない。しかし、私が現に見ている藤山部屋は、ある人物の過去の残骸ではなく、総じて過去に生きて呼吸した精神に至る一つの居所である。それは、はつきりした知覚の産物として現前する。私がこの精神の持ち主が歴史の上にある時代を現に生きて、語つたのだと感ずる限り、現代にも流通する語りかけのようなものを受け取る。これは神秘的な作用というよりも、体験である。しかも理念と現実が交流し合う清々しい体験である。

石橋先生の思想は相当に古い。古くて今も新しい。1911年、「軍洋時論」の編集部に入った二十代後半にして、すでに石橋先生の思想と文体はほとんど完成されていたかに見える。石橋先生は独自の筆をもって現実を描いて見せることで、古い思想を再生させた。ジャーナリストとして名声を得た後も、自身は有髪の僧と言っていたそうだが、それだけで石橋先生の真意ははかることができない。宗教者といくら言つても、その心の声は教壇や政治などの現実的言動の中にしか現れなかつたからである。だから、石橋先生を知るには、言動を見るほうがよほどすつきりする。

言うまでもないことだが、人も会社も様々な時代を滑り坂けていく。文化も、価値観も、技術も、その都度最善と思つたものを選択していく。それらすべてを一律に論じるなどおおよそ不可能である。できるのは、その時々相対的な善をなすことくらいである。人や会社の真面目な試練を一概に論ずることなどできない。

らあえて言うのだが、日々の現実を生きていると、喜怒哀楽が断ち切られる。うかつに口に出してしまつたらかえつて真意が断ち切られる。理念は語るものではない。生きるものなのだ。

10年がたち、退社を控えた3月のある休日、私は再び身延を訪れた。50歳を前にして、いまだ悠々つある自分を思つた。悠々などとはどこまでいつても私事であつて、公表する価値などない。ただ悠々つ来た小さな山道のことを考えた。山中の苔むした墓所の前に立つた時、何か厚い雲に覆われた木立の切れ間に先を見た気がした。

石橋先生は衰わず語りかけをやめずにいるのだという気がした。徹底した自由主義の実践家だつたこの人の、黒くて鈍いつやを帯びた髪石を見ていると、われながら驚くほどの清々しい思いに満たされた。

いつしか高校時代に日本史の教科書で初めて先生を知つた時のことか思い出された。次いで、早稲田の大学時代に松尾尊光編「石橋漢山評論集」を手にし、その卓越した文体と主張内容、そして一切無駄というものない研ぎ澄まされた編集技量に驚かざるをえなかつた日々が胸に迫つた。私は幾度この本にはつと胸を突かれる感覚を覚えたかわからない。四半世紀の間、東洋経済という会社で働くほどに、不思議と石橋先生の声が次第に大きく聞こえてきたような気がした。それは、今にして思えば、先の見えない山道だったのであり、迷うほどに明滅する光のように、石橋先生は語りかけていたと感ずる。

私は石橋先生の声をき内声に動まされてきたのだと思つた。

井坂康志氏略歴

1972年埼玉県加須市生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。東京大学大学院人文社会科学系研究科博士課程単位取得退学。博士(商学)。東洋経済新報社を経て、現在、ものづくり大学教養教育センター教授。石橋漢山記念財団研究員。著書に「P・F・ドラッグカー——マホシメント思想の源流と展望」(文眞堂、経営学史学会奨励賞受賞)等。

現在、私の研究室のドアの外側に、石橋先生の小さな肖像写真が飾られている。出勤時には目が合う。黙礼する。その眼はまっすぐで、冷たく刺すようでありながら、包み込む慈愛を深奥に宿している。「井坂君、今日も君なりの仕方、せいぜいがんばりたまえ」と声をかけてくれる気がする。書棚には尊敬する社の先輩、藤原豊氏からご寄贈いただいた「石橋漢山全集」の初版本、東洋経済新報社百年史と百二十年史が配架されている。

先日、若い学料事務員の方から不意に質問を受けた。「研究室の入り口にかかっている写真の方、目の力がすごいですね。となたですか」

私の答えは次のもので十分だつた。「石橋漢山先生、私の最も尊敬する人です」

* * *

しかし同時にそこには、個別的な問題を貫いて、何かしら通底する核のようなものが見えるはずである。一言でいえばそれはいくらかしつこいようだが、やはり畏敬の念ではないかと私は思うのだ。とかく現実というものは、あらゆる種類の障害に満ちている。昨今の出版をめぐる激動的試練もある。あるいは政治的・経済的側面もある。単なる弱さもある。ありとあらゆる現実的試練の中でも、何とかして社業を継続させるのは、畏敬の念なくしてありえない。その畏敬の念を長期にわたつて持続させていこうとすれば、どうしても理念の品質が問題になってくる。その理念を十全に体現した人の空聞は、畏敬の念を収めるアイコンの役割を果たしてくれる。会社に限らず、人間の営みとは、物的な力と精神的な力の両輪である。それらが互いに均衡のうちに前進していくとき、しなやかな方向感と有効な動力を生み出すことができる。

現在、石橋先生の名に今一つびんとこない方も少なくないかもしれない。だが、嘆くべきことではない。一つの精神が人に愛内するとは、本来そのようなものだからだ。

別に石橋先生のことなど毎日思ひ出すのは無用である。本人大だつてそうされたくはないだろう。

忘れるとは、記憶をなくすることではない。反対である。忘れるとは一種の修行である。思ひ出すでもなく実行できるまでの鍛錬だ。私も東洋経済に在籍していた時そうだったか

* * *